大正は遠くなりにけり

大谷正彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大正は遠くなりにけり

【Ｎコード】

Ｎ２４２０Ｆ

【作者名】

大谷正彦

【あらすじ】

大正生まれの筆者の目から見た「大正」「昭和」とはどんな時代だったのか。太平洋戦争そして戦後という激動の時代に青春時代をすごしてきた「私」が育った時代、感じてきた事。語り継ぎたい記憶の記録です。

第一部　激動の時代と大正生れの歌１

人間の営む社会はその時代によって平穏であったり、騒然たる世の中であったりと様々である。

無事太平の世があれば、激動の時代もある。

私がこれから書こうとするのは私がこの世に生を享けてから８５歳の今日迄生きてきた日本の国で、私の脳裏にある種々様々の事象の中で、私がどうしても後世の人々に伝え残しておきたいと思うことをなるべく順をおって書き残す自分史に近いものである。

順を追うと書いたが、それに固執すると書きにくくなるので、必ずしも年代順の出来事を順序良く書くと言うわけではない。

私が生まれたのは大正９年である。西暦でいえば１９２０年だ。すなわち、大正生まれである。言い換えれば悲劇的な大正生まれなのだ。

巷でよく言われる日本の十五年戦争とは、昭和６年から昭和２０年の第二次世界大戦の終結までの１５年間の戦争に明け暮れた時代のことなのだ。

その戦争の１５年もの長い間、戦場では戦わされ、或いは銃後で戦争を支える力としてのあらゆる面での仕事や責任を背負わされた人々の主力が、大正生まれの男女の青壮年であった。

そして日本は明治生まれの人々の無知と驕りと自惚れにより無謀な戦争に突入し、まるで蟷螂（カマキリ）の龍車に向かうがごとき状態で敗戦の憂き目を見たのであった。

戦いに敗れた祖国日本はまさに「国敗れて山河在り」の言葉そのままの姿であった。

戦後昭和２１年に赤道の南の無人島からやっとの思いで母国へ帰還できた私は、栄養失調の身を一本の杖に托し、自分で作った背負袋を肩にして私の生還を神頼みして待ち続けていた父親の元へ戻る事が出来た。

私の兄も同じ頃、大陸の最奥地から生還した。

二人の息子を戦争に取られた親は、どんなにか待ち焦がれていたことであろう。

この点に関しては、私共兄弟は最高の親孝行息子であったと言える。

何しろ兄が7年、私が5年間と戦地へ送られ、まして私は最も死亡率が高い航空隊の戦闘機のパイロットであったので、父は殆ど生きて還る事はありえないと思っていた。

それでも親は戦中戦後にかけて、ろくに食べ物も手に入らない時代に、息子共が生きて帰ってきたら食べさせようと米を蓄えて食べずに残して待っていてくれたのであった。

帰還できた私の方も、東京大田区在住の家族が無事に生存しているかどうかは全く不明であったし、東京は丸焼けの焼け野原になっていると聞いていたので、直接東京へは行かず、父の出生地である伊勢の片田舎の実家へ上陸地の広島の大竹港から大阪を経由していったのであった。

遅々の成果で叔父に父が元気でおり、更に少し前に兄も無事生還できたと聞き安心した。

こうして私の戦後の人生はスタートした。

この稿の第一部の表題とした「激動の時代と大正生れの歌」というのは、ここまでに書いた十五年戦争なる時代に、その荒波に翻弄された我々大正生まれの日本人の真情をそのままに歌いし歌であり、大正生まれの人々の悲しく哀れな人生と人生観を余すことなく歌い上げている事で、この世代の人々に広く静かに歌われてきた歌であ

る。
よって明治の人や昭和の人々、更に平成の人々には知られていない歌なのだ。
我々大正生まれの人間のみの心の歌である。
以下、この歌に関する事柄を書くことにする。
それは何時のことであったかは定かではないのだが、ある時私は共に復員した戦友の一人から一巻の歌のテープを貰った。
その戦友は、これはなかなか良い歌だぞ。今関西の方で大変流行っているらしいよと言うて、歌詞と共に手渡してくれたのだった。
私は早速プレイヤーに掛けてこの曲を聴いてみた。

曲の題名は「大正生れ」であった。
曲は日本人の好むマイナー調のメロディーで、雰囲気としては軍歌の「戦友」と一脈相通ずるものがある。
歌詞のプリントを目で追いながら、私はずっとこの始めて聴く歌を聴いた。
曲が終わった時私は、自分が何時の間にか泣いていたことに気が付いた。涙が頬を伝って静かに流れていたのだった。
何という歌だ。
何で俺の思っていることを全部歌っているのだ。
そうだよ。その通りだよ。
と、自分で自分の心に独り言を言った。
私は早速ダビングに取り掛かり、何本かのテープを複製した。
そしてその後催された飛行学校の同期生の戦友会に持って行き、仲間の連中に披露したのであった。戦友の中には既にこの歌を知っている者も何人かはおり、歌詞のプリントを見ながら一緒に歌った。歌いやすく覚えやすい曲であり、すぐに大勢で斉唱できるようになった。
そしてその頃既に名古屋より西の方の地方では、広く歌われていることも知った。

しかし一般の歌と違って、この歌は大正生まれの中高年者の間だけに深く広く伝わっていっており、一般の人々には殆ど知られてはいないことも同時に知った。

それから暫くたって、ＪＲのＰＲ誌の「ジパング倶楽部」にある投書者が「大正生れ」の歌を教えて欲しいとの要望の投稿が掲載された。

ジパング倶楽部は高年齢者の三割引きサービスを主とするＪＲの高齢者対象の組織であり、したがって読者は当然大正生まれが主流なのだ。

私は早速テープと譜面を送った。

私の他にも全国から沢山の人々がテープや楽譜を送ってくれたそうである。

この「大正生れ」の作詞者は「小林朗」さんという人であり、始めて書いて世に出されたのは昭和５０年であるらしい。

私の手許にあるプリントのコピーを作者には無断で掲載させていただくが、同じ大正生まれの男として多分お許し下さると信じている。

以下は、作詞者小林朗さんの文章である。

第一部　激動の時代と大正生れの歌２

大正生れ

大正生れの男児、僅か十五年間の間に限られた区切りであり、その区切りも、運命的に余りにあらゆる面で明瞭に画されたものと言う事が出来る。

大正時代に生れた男児の殆どは、日中事変や、引き続いては太平洋戦争の兵力の中心であった。軍拡と、それに伴う軍略によって昭和の初期からはじまった戦禍の犠牲になって戦死した二百数十万の兵の殆どは、この大正生れの男児であったのである。

更には戦後の混乱期から立ち上がって、国土の復興に原動力になり得たものは、終戦当時に、二十歳から三十五歳に至る大正生れの人間であったことも自明のことであろう。

加えてその後十年、二十年、三十年と、この大正生れの年齢に加算して、当時の世情を夫々に分析すれば、現在の世界に位置する繁栄日本の存在も、その力の源泉は何であったかは言わずもがなのことであろう。

現在大正生まれと呼ばれる者のしんがりも、既に目の前にいわゆる定年なるものが迫っている。働くことはもうおやめになっていいですよという定年が、大正生まれの最後の若者に訪れているのである。

それにしても、この大正生れの人々の労苦に比例した報いは何であったろうか。

国家の責任は戦争中も、また戦後においても、その身体でもって直接に果たしてきた人間である。

果たして何によって報われているのであろうか。

御苦労様とのねぎらいの言葉を頂く事もなく、有難うと、その成

果に感謝されることもなく、黙って微笑だけを浮かべているだけの大正生れでよいのかなと、ふと思うことがある。

慰めもいらない、感謝も欲しない。

だがせめて、お互いに一緒になって呼応する何かがあってもいいのじゃなかろうか。

それには歌がある。そしてそれも、大正生れの男らしく、更に尚励ましあうものでなければなるまい。

やむことを知らぬ男児群、大正生れの心の行進譜を、高らかに合唱しようではないか。

小林　朗

第一部　激動の時代と大正生れの歌３

大正生れ

1. 大正生れの俺たちは　明治の親父に育てられ
忠義愛国そのままに　お国の為に働いて
みんなの為に死んでゆきや　日本男児の本懐と
覚悟を決めてきた　なあお前

2. 大正生れの青春は　全て戦（いくさ）の只中で
戦いごとの尖兵（せんぺい）は　みな大正の俺たちだ
終戦迎えたその時は　西に東に駆け回り
苦しかったぞ　なあお前

3. 大正生れの俺たちにゃ　再建日本の大仕事
政治　経済　教育と　ただがむしゃらに幾十年
泣きも笑いも出尽くして　やっと振り向きゃ乱れ足
まだまだやらなきゃ　なあお前

4. 大正生れの俺たちは　幾つになってもよい男
子供も今ではパパになり　可愛い孫も育ってる
それでもまだまだ若造だ　やらねばならぬことがある
休んじゃならぬぞ　なあお前
しっかりやろうぜ　なあお前

鎮魂譜

大正生れの俺たちの
別れし友の魂魄(たましい)は
空ならば　なお　天翔り
海ならば　なお　水づき揺れ
大地(つち)ならば　なお　草むさん
いでや　我が友　この胸に
しかと　眠れや　なあお前

この歌はいつの間にか、じわじわと大正生れの人々の間に広まっていき、各地の戦友会や大正会の会合で歌われるようになっていった。

そしてこの歌は専ら男の事を歌ったものであった事から、同じ大正生れの女の歌が無いのは片手落ちであるとの声が何処からともなく起こり、大正生れの歌の女性篇が出来た。

次に、佐々木律子氏補作の歌を書き足す。

大正生れ（女性篇）

補作　佐々木律子・玉城百合子

1．大正生れの私達　明治の母に育てられ
　勤労奉仕は当たり前　国防婦人のたすきがけ
　みんなのためにと頑張った
　これぞ大和撫子と　覚悟を決めていた

ねえ　あなた

2.
大正生れの私達　すべて戦争(いくさ)のただ中で
銃後の守りはまかされた　みな大正の私達
終戦迎えたその時は　たのみの伴侶は皆軍神
寂しかったね　ねえ　あなた

3.
大正生れの私達　再建日本の女房役
姑につかえ子育てと　ただがむしゃらに三十年
泣きも笑いも我慢して　やっと振り向きゃ白い髪
それでもやらなきゃ　ねえ　あなた

4.
大正生れの私達　今では五十六十と
子供もよいパパママとなり　可愛い孫のお守役
今では嫁も強くなり　それでも引かれぬこともある
休んじゃおれない　ねえ　あなた
しっかりやりましょ　ねえ　あなた

以上が「大正生まれ」の作詞者小林朗氏の文と歌詞、女性篇作者の佐々木律子氏と、玉城百合子氏の歌詞である。
尚、私の手許に有する楽譜はニ短調四拍子の曲で、作曲は「大野正雄」氏。編曲は「大前成之」氏となっていることを付記する。

第二部　大正生れの育った時代１

昭和、平成の時代に生まれ育った人々にとって、我々大正世代の人間の育った次代の日本とはどんな国であったのか、またどんな日本人が生活していた時代であったのかは当然知る術がないことは理（ことわり）の当然であろう。

私は大正の概ね中期に生れた。

私は子供の頃よく日本人の平均寿命は４２歳であると聞かされ、また日本人の一人一人は生まれたと同時に一人二百円の国家的借金を背負っているのだから、その借金をお国の為に返済してから死ななくてはならないのだと言われて育った。

私は物心着いた時分には父方の祖父母は既にこの世にはいなかった。

当時の日本としては長命であった母方の祖父母は二人とも達者で暮らしており、伊勢の宇治山田（現在の伊勢市）の皇大神宮の外宮の近くで質屋を営んでいた。

私の頼りない記憶では、この家柄はその地方のある程度以上の、今の言い方で言うと資産の有る家であったらしい。したがって、質屋という金融機関を家業としていたのであろう。

祖母の実家は藤井大丸という屋号の一族で、今の大丸デパートの前身の大きな呉服屋の一派であったらしい。

祖父は西暦１８６０年即ち万延元年の生まれで、その年の三月三日に時の大老彦根藩主井伊直弼が江戸城の桜田門外で、水戸藩の浪士共に襲撃せられて殺害されたと聞かされた。

祖父母は共に徳川時代の日本人であったので当然きわめて小柄で小さな体格であった。

私は余り大きい方ではなく、所謂中肉中背であるが、学生時代当時の寸法で五尺三寸二分で、祖父母はよく「御一新（ごいっしん）」（明治維新のことを昔の人はこう言っていた）からは日本の人は随分大きくなっ

たものだと私共を見上げて言っていた。
平成の現在、終戦後は日本人も随分大きくなったと言われるが、それと全く同じ事を言っていたのが面白くおかしく思われる。
この祖父がある時私に、旅に出る時は細い竹の杖を持って出かけると良い。よく山道の峠などで猿の群れに囲まれる時があるが、それは旅人の弁当を狙って威嚇するのだが、そんな時にはその手に持っている細い竹の杖を上下に振って「ひゅうひゅう」と音を立てると猿はどこかへ恐れて去って行くものだ。と教えてくれたものだ。
祖父の頭の中には「旅」「歩く」「山の峠道」「猿の襲撃」「撃退法」と旅行時の常識が組み込まれていたのだ。
宇宙時代の今と比べて一世紀程の時間の差というものが如実に現れていて、誠に面白く顧みる次第である。
この祖父はハイカラ好みの人であった。
酒が好きで朝夕晩酌を楽しんでいたが、ある時どこからか硝子製の銚子を手に入れてきて早速晩酌に使用した。瀬戸物の品と違って透明で中の酒の分量が一目で分るので大満足で、文明の利器は便利なものだと一人悦に入っていた顔が忘れられない。
昭和の初期に祖父はなんと海外旅行に出かけた。行き先は当時の支那の港町、大都会の上海であった。
その頃の感覚では、今で言えば南極旅行へでも行くような気分であった。
まして老人の身である。周囲のものは皆大層心配したが当人は意気揚々たるものだった。
但し問題が一つあった。洋服である。祖父は洋服を新調したが、生まれて始めて着る背広はまだ良いのだが、当時の替え襟付きのワイシャツに、更に難問のネクタイがあった。
黒っぽい細身のネクタイを買った迄は良かったが、どうしてもこれが上手く結べないのだ。随分練習したが、とうとう断念し、どこかで結んであるネクタイを探して買ってきて、これを首につけた。首の後ろで留め具で上手く止められるのもなかなか難しく随分稽古

を重ねてどうやらやっとネクタイは首にぶら下がったのだった。
今考えると祖父はたいした人であった。幕末時代の人間が七十歳になってから、洋服を着てネクタイを締めて海外旅行に行ったのだ。
今と違って東京から関西へ行くのも大変だった時代の事である。
私や私の妻の母親も、一回も洋服を着る事が無く一生を終わったというのに、その親の年代で洋服を着て外遊したという事は、現代の日本人には考えられない位の大仕事だった。

第二部　大正生れの育った時代２

私の育った時代の事を色々と書くに当って、私が育つ頃生活した土地についての説明を要する事に気が付いた。

現在の日本でも未だそうであるが、土地柄というものがそれぞれの土地にあって、風俗や習慣や行事等は皆異なっているものが多い。

今でもそうであるから大正から昭和の初期には、甚だしく異なっていたのは当然である。それらの事を書くには私の住んだ土地を説明する必要が生じてくる。

私は最初に書いた通り大正九年即ち今流で申せば１９２０年に神戸市で生まれた。

私の父がある保険会社の新進の若い支店長として神戸支社に赴任して東京本社から移動してきて間もない時であったのだ。私の四年上の兄は大正五年に東京で生まれている。

父は明治四十年代に東京の慶応義塾の理財科（今の経済学部に相当）に入塾し大正三年に卒業した。福沢諭吉先生の弟子の旧伊勢島羽藩主の角野兄弟の一人の幾之進先生が社長をしておられた今で言う損害保険会社に入社した。将来を嘱望されて入社した新入社員であったらしい。

東京の麻布笄町（こうがいちょう）で新世帯を持ち、兄と姉を儲けた後神戸へ支店長として栄転した。

神戸で私と弟が生まれたのである。したがって私の人間としての最も古い記憶は神戸に始まるわけだ。

私がこれから書く出来事は、私の年齢は総て現在の満年齢ではなくて、昔の日本の数え年で書くことにする。そうでないと私の古い頭は混乱してしまうからである。

即ち生まれた年は一歳であり、たとえ正月元旦に生まれても大晦日に生まれてもその年号に生まれた人は同年齢であるから極めて分りやすい。

満年齢では例えば兄弟姉妹や夫婦の年の差が、月によって変わる事になってしまう。夫と妻が三つ違いか二つ違いかが確定出来ない。一年の内に自分の年が変わるなんて、大正生まれの私には出来ないのだ。

余談はさておき私は一歳から五歳の途中迄を神戸で過ごした。私が四歳の時関東大震災が起こった。幼かった私には大地震の記憶は全く無い。

唯一の記憶は隣の部屋の柱時計（振り子時計）が止まったと母と女中が話していた事だけで、他には何もない。

家はしないの葺合の旗塚通りという所であったらしい。近くには公設市場があって、母と女中が買い物に行くときはいつも手を引かれて行ったものだ。女中は隣県の岡山県の農村から来た娘で名を直原トメといった。長く奉公してくれて神戸から仙台、仙台から九州博多と遅々の転任に伴ってずーっと一緒について来てくれた。

話は全く関係ないことになるが、先頃新聞記事の中で岡山県の人の事が書いてあり、その姓が直原さんであったので遠い昔の日の事を思い出したりしたことがある。昔は姓を聞くと大体出身地が分ったものであった。

昔は女中を「姐や（ねえや）」と呼んだ。山田籍作の童謡で有名な「赤とんぼ」の歌にも「銃後で姐やは嫁に行き」と歌われている。

わが家の女中の「トメ姐や」は大勢の兄弟姉妹が続々と生まれたので、この娘が生まれたのを最後に止めたいと念じて「留（トメ）」と名を付けたという話を聞いた覚えがある。

留姐やに手を引かれて公設市場へ買い物に行くのは楽しくて面白かった。

魚屋のオッサンが大声で呼び込みの歌を唄っていた。今でもその歌が唄える。

「鰯（いわ）ちゃん買いなーれ。買いなーれはどうじや、日暮れの烏何見て帰る」と音吐朗々（おんとろうろう）と高らかにうたい叫んでいた

ものだった。
神戸の目抜きの繁華街は元町であった。どういうわけか港町は横浜も神戸も賑やかな通りは元町である。
この元町の坂道を降りて行く途中の左側に大きな瀬戸物産があった。その店の看板に立派で大きな青い般若の面が掲げられていた。
般若であるから当然怖い顔をしている。それが幼い私には極度に恐ろしく思われて、何故か私はそれが「お獅子」であると思っていた。だから私が言う事を聞かないで駄々をこねて泣いたりすると、隣の部屋との境目の唐紙を向こう側からどんどんと叩いて「元町のオシシダゾー。泣いている子を連れに来たぞー」と怒鳴るのだ。
私はそれが「おとめさん」である事はわかっているのに、やはり怖くなって泣き止むのだった。何故か八十年経った今でもあの時の般若の面の表情の恐ろしさが忘れられない。
とにかく私が神戸にいたのは数え年で五歳までの事であるから、記憶といえる程のものは殆ど無いのであって、我が家の筋向いに福島さんという家があり、その家族はアメリカ帰りの世帯であって、私と同じ位の年齢の女の子がいて、その子はベビーちゃんと読まれていたのを覚えている。近所には遊び相手になるような子供は他にいなかったので、私はいつもベビーちゃんと遊んでいた。
ある時私の母が当時は沢山いた野良犬に噛まれて怪我をした事があったが、その時母の足の向う脛に傷をこうむり、真っ白な脛に赤い血が筋になって流れていた事を何故かはっきりと憶えている。神戸時代の記憶はそんな程度しかない。

第二部　大正時代の育った時代３

私の一家はその後父親が仙台支店長になって転任するのに伴って仙台に引越しをした。それが大正何年であったのかの記憶はないのであるが、小学校入学の都市から遡って逆算してみると恐らく大正十三年であったのではないかと考えられる。それは数え年で五歳の時である。

仙台での生活は当時の町名では光禅寺通りという場所であった。国鉄仙台駅前の通りを方向としては青森の方角へ向かって坂を上がって行くのであるが、その坂は「茂市が坂」と呼ばれていた。私の父の名が「茂吉」であったので幼い私にとってはすこぶる覚えやすい名前であった。

当時はまだ仙台には市内電車がない時代であり、茂市が坂は余り広い道ではなかった。

その坂を概ね上り切った辺りが光禅寺通りと呼ばれていたらしい。

私達が借りた住居は昔の仙台藩の武家屋敷であった。

今の日本の地方都市へ行くと、各地にそれぞれ旧武家屋敷群が残っていて、その土地の観光資源になっていて大切に維持保存されているが、それらの屋敷を見る度に私は大正の終わり頃から昭和の当初に掛けての時代に私の一家が住んだ家を思い出すのである。

我が家の門の前の道路を隔てて対面して向こう側にも立派な武家屋敷があった。その家を借りて住んでいた家族は太田さんという人の一家で有名人であった。

父は前の家の太田さんは太田正雄博士という人で東北帝国大学医学部のえらい教授であるが、それよりも別の面で更に日本中に名の知れ渡っている人なんだよと教えてくれた。

太田教授はペンネームを木下杢太郎といって、随筆、小説、劇作、評論等で有名な文人であり、日本文学全集にも先生の作品は色々と収められている人なんだと説明してくれた。

その太田家には私と同年の男の子がいた。
そしてその子は太田姓ではなくて、母方の姓を名乗っていて「河合正一」ち言った。私が正彦、彼は正一で、二人は私が「正ちゃん」、向こうが「正ちゃん」と呼ばれる事になった。
この正ちゃんは私の友達となった最初の人物である。
二人は一緒に東本願寺の付属幼稚園に入園した。当時は珍しかった今で言う二年保育であった。
朝起きてから夜寝るまで殆ど一日中一緒にいて過ごした。
仙台は今もそうだろうが、その頃は森の都と呼ばれる程樹木の多い街であった。私の家には胡桃の大木やぐみの木があり、正ちゃんの家には栗の大木が何本もあり、時期になるとそれらの果実を取って焚き火で焼いて食べた事を思い出す。
二人は進学校である帰範付属小学校に入る為にその頃珍しかった入学試験に臨んだ。
今でも記憶にあるのは試験官の先生が一枚の紙に描かれた絵を見せて「この絵は、何か変ではないかな？」と尋ねたものである。私は暫く見てから脚が一本足りないと答えた。先生はニッコリと笑って「そうよく分りましたね」と褒めてくれたのだった。
描かれていた絵は机の脚が三本しか描いてなかったのであった。
二人は共に入学出来て、毎日一緒に帰範付属小学校に通った。この学校は通称では「フゾク」と呼ばれており、我が家からは当時の道程で十丁と言われていた。
一年生の児童にとって、特に寒い冬の季節には道路が凍て付く当時の東北地方では十丁の通学は大変だと親は心配していたが、当の本人共は至って平気で毎日通っていた。
平成の時代の今のことは知らないが、大正時代の仙台は寺の名の付く町名が多かったように憶えている。また町名の下の字を「マチ」と読むところを「チョウ」と発音するところは前者は漢字で書く場合は「町」と書き後者の「チョウ」の方は「丁」と書いていた。だから初めて見たり聞いたりする町名が「マチ」と発音するか「チョ

ウ」と言えば良いのか分らなくて困る事はなかったのである。
後年大人になってから東京に住むようになってから、よく江戸っ子の人が東京の町名を言う場合に、神田の小川町（オガワマチ）、須田町（スダチョウ）、神保町（ジンボウチョウ）と間違って発音する人を「田舎っぺ」と馬鹿にしたりするのを聞いて東京も仙台式にすれば良いのにと思ったりしたものであった。

第二部　大正生れの育った時代４

仙台在住当時に何らかの博覧会が催された。

その博覧会を見に伊勢の祖父母がはるばる仙台までやってきた。

戦後日本の大阪万博の目玉は月の石であり宇宙船であり、またその後の平成十七年の名古屋万博ではマンモスであったりしたが、当時の仙台の博覧会では私の記憶では「エスカレーター」であり「テレビジョン」であった。また子供の時には何と言っても「ウォーターシュート」が最大の魅力であった。

ラジオは当時ＴＯＡＫ（東京）とＪＯＢＫ（大阪）は始まっていたような気がするが、仙台のＪＤＨＫはまだ無かった様に憶えているが確かではない。

エスカレーターは自動的に動く階段であり、人は自分で歩かなくても段々の方が自動的に動いてくれる文明の利器であるとの事で、乗る人々の長い列が出来て、確か若干の料金を支払って乗ったような気がする。

会場内の小さな丘に設置されたエスカレーターは、丘の麓から丘の頂上まで階段にただ立っていて景色を見ているといつの間にか丘の上に到着できるので大層人気があった。

テレビジョンなる物は受像機の画面に何か分らないが曖昧模糊とした画像の如きものが映っているだけで、それが一体何の映像なのかは全く識別できない程度のものであった。しかしこれを見る人々は将来人類が、現在あるような機械で、遠くの物が活動写真の様に見る事が出来る時代が必ず来ると思って、脅威の目で見たのであった。

その頃テレビジョンは研究者や組織によって異なる方式で開発されていたようで、巷の人々は「早稲田式」「高柳式」「浜松式」等と子供の我々まで名称を覚えていたものである。

更に子供たちには何と言ってもウォーターシュートが最大の憧れ

であり魅力であった。
何しろ舟が小さな山の上から地面の池に向かって突進して降りて来て、轟音と共に池の水面に激突し、大きな水しぶきを上げて無事に着水するというのだから、特に男の子にはたまらない魅力があった。
その頃は今でいうビルディングなる名称は使われてはおらず、西洋館と言っていた。
仙台の街の中心部に何階建てであったかは憶えては居ないのが、多分五～六階ほどの今の眼で見れば極く小さなビルがあった。
その西洋館にはこれまた小さなエレベーターが設置されていた。
そのビルの上のほうの階には食堂があって、西洋風の料理を食べさせていた。
時たま我が家は一家総出でそのビルの食堂に西洋料理を食べに行った様な気がする。
ハイカラな食堂で西洋料理を食べるのは勿論極めて嬉しい事であったが、それにも増してエレベーターに乗れる事は子供たちにとって最大の喜びであった。
エレベーターが上下に動いたり止まったりする度におへその下がスーッとすると言って大はしゃぎした事を覚えている。

第二部　大正生れの育った時代５

仙台在住中の最も印象に残る出来事はラジオの出現だった。
既に東京や大阪ではラジオ放送が開始されていたが地方都市の仙台では未だだった。
仙台にもラジオ局が出来て放送が始まるというので市民は期待で皆がその日を待っていた。
私の母の弟はその頃東北帝国大学の理学部の学生であって、二番目の姉である私の母の家に下宿人の如くに同居して通学していたのだった。
この叔父は所謂学者肌の人で、家業の質屋の跡を継げるような人ではなかった。
叔父は早速受信機を造り、また子供用には何台かの鉱石ラジオをこしらえて与えてくれた。
最初の頃は受信用のラッパは無くて、レシーバーで聞く方式であった。今でいうイヤホンである。
したがって当然一人宛交代で順番に頭にかけたレシーバーで聞くのであるから、一人が聞いている間は他のものには聞くことが出来ない。
皆早く聞きたくてムズムズしながら順番を待つのであった。
放送開始の日、私は学校が終わると十町の道を一目散に走って帰宅した。
座敷には家族全員が丸く輪になって座っており、真中にラジオが置かれていた。
そのうちに時間が来て放送開始となった。タタミの上のレシーバーからピーピーという様な音が流れ出た。
皆は一斉に興奮して「あっ鳴った鳴った」と叫んだものだった。
何しろ生まれて初めて聞く音である。その音は遥か遠方で発する音であり、当然眼に見えない遠い所の音なのである。

今この所にいる人間達は、今迄に聞く事の出来なかった遠くで発生した音を、同時に聞くことが出来たのだという不思議さと科学の力を現実に身に沁みて何となく身体中がゾクゾクする感覚を感じたのであった。

叔父は、これは雑音であって人の声が入らないので具合が悪いところを直すので少し待って欲しいと言って修理に掛かった。

修繕が済んで暫くアナウンサーの音声が入るようになって、皆は順次耳に当てたレシーバーを通じて人の声を聞くことが出来た。

放送の内容が何であったか、何をアナウンサーは喋ったのかの記憶は私が幼かったせいで全く存在しない。

しかし人間が近代科学を生み出し、文明が急速に進み出した二十世紀の初頭の時代に生きた我々の世代は、日進月歩の現実の世界に日々接して生き、目まぐるしく新しい事物に接しながら近代社会の中へと進んで行ったのだ。

私が少年時代に子供たちに人気があった科学的未来空想小説の海野十三さんの書く物語をその頃の少年は近い将来の現実として捉えて胸を膨らませたものであった。

第三部　昭和初期の九州福岡１

大正の時代は大正十五年の年末に大正天皇の崩御によって十二月に昭和となった。

私が数え年で七歳の時であった。即ち幼稚園の今で言う年長組の時だった。

すぐに正月を迎え昭和二年と年号が変わって私は八歳になり、四月には帰範附属小学校へ上がる事となった。

大正天皇の御大葬は私の記憶では二月に行われた様に思われる。

その理由は幼稚園で御大葬の式典が行われたときに皆で歌った御大葬の歌が、今でも私は歌うことが出来てその歌詞を覚えているからである。その歌詞の中に「如月の空はる朝み」という文言があるからだ。

その後に「黒白（あやめ）も分らぬ闇路（やみじ）を行く」と続くのだが、如月とは二月の事であるからきっと御大葬の行われたのは二月であったと思う次第なのだ。

御大葬の日は酷く寒い日だったことしか覚えていないが、何故かその歌は今でもスラスラと口から出るのが不思議な気がする。

大体私は若い頃は歌を覚えるのは得意な方であったし、実際に古い流行歌（はやりうた）や軍歌、軍国歌謡、歌謡曲等は今でも人々に驚かれるほど知っていて歌うことが出来るのだ。

しかしこの後行われた昭和天皇の御大典の時には、奉祝の歌があった筈であるのに全く何の憶えも無いのが私にはその理由が分らない。あるいは奉祝歌が作られなかったのかもと考えられる。

四月になって入学した帰範附属小学校は今で言えば進学校であって、中学、高等学校、大学へと進学する子供が殆どであった。

当時は現在と違って義務教育だけで終わる人が大多数の時代であったので、この「フゾク小学校」へ上がる子供の家庭は俗に言う「良い家の子」が多かった。

今の日本でも有名大学へ入るのは容易ではないが、その頃はその様な大学へ入る事は大学そのものも絶対数も少なかった事もあり、今よりも更に困難であったように私は思っている。

ちなみに私が大学在学中の学生時代に私が在籍していた慶応義塾の経済学部は、入学できる者の比率は２５人に1人であった。そのことは私がその時の試験場に臨席する試験管と一般に呼ばれている立会い監視員を務めた経験があるので確かである。確か一日の日当を五円位支給されたと憶えている。受験者の中学生や浪人の数が余りに多いので、正規の教職員だけでは手不足になるので、信頼できると思われる学生を指名して、応じてくれた現役学生を採用したのだった。当時その金額は学生にとってなかなかの大金であったので私は二つ返事で応募採用された。

昼食を学生食堂で食べると１５銭でライスカレーやハヤシライスが食べられた頃である。

話が度々横道に外れるが「フゾク小学校」では教生（きょうせい）と呼ばれる帰範学校の学生の実習の先生が一つのクラスに四人程付いていた。

本来の教諭の授業の外にこの教生の先生は当然若くて一年生の生徒には大きなお兄さん的存在であり、面白く遊んでくれて毎日学校生活を楽しいものにしてくれた。

人手が余る程あるので教育内容も充実していて、低学年でも正規の国定教科書に加えて副読本も使って教育が行われていた。

したがって正規の進度より遥かに先へ進んだ授業が先行していて、後は普通の小学校へ転向した時に私はその差の余りにも大きな事に驚いたものだった。

この学校では男女それぞれ一クラス宛があるのみで各学年に幾クラスもある普通一般の小学校とは随分異なっていた。

しかし男女七歳にして席を同じうせずの時代の事であったので、女子児童との接点は全く無かったに等しく、八十有余歳の私は今尚女子生徒の存在に関する記憶や思い出は全くの皆無であり、女生徒が同じ時期、同じ学校にいたという事が信じられないのである。

日本が戦争に敗れて迎えた終戦の後、暫くのときを経て昔を懐古する心の余裕が出て来始め、色々の同窓、同期の会活動が活発になってこの「フゾク小学校」のクラス会も誕生し活動が始まった。

音頭取りや旗振り役をやる者も、戦争の中で生き残った者の中から出てきた。

前のほうで述べられた仙台市の光禅寺通りの我が家の正面の太田博士の倅の河合正一（正ちゃん）もその内の一人で、私を探し出して連絡をくれた。正ちゃんは横浜大学の教授になっていて建設の方の学者で有名な先生だとの事を知った。また庶務をやってくれているのはＫＤＤの重役の児島光雄君で度々会合を企画して面倒見の良い幹事さんになっていた。

会は名簿を「八申会（ハッシンカイ）」と名付けられており女子生徒も何名かいた。

私は先に書いた様に女の子の存在すら意識に無かったので、女子の名前が名簿にプリントされているのに驚きを喫したものだった。「へエーッ女もいたのかい？」と私は正ちゃんや児島君に尋ねて笑われた事を覚えている。進学校の「フゾク小学校」出身者は殆ど皆一流大学を卒業してそれぞれ社会人として各方面の要職について祖国再建に働いておられたが、その職業の比率において大学教授が多いのにも驚いたのだった。

矢張りエリートというのか秀才といえば良いのかは分らないが、氏や素性が良くて高度の英才教育を受けた連中は皆それぞれ成るべくして成ったのだと言われる人生を歩いていたと思われる。

「八申会」の名称は昭和八年に「フゾク小学校」を卒業した申年生（サルドシ）まれ（大正九年生まれ）の者の会の意味である。

自分の事を言うのは何か抵抗を覚えるのではあるが、私は総て本当の事を書いておきたいので敢えて赤裸々に書いて行く事にする。

この「フゾク小学校」に私は一年の入学から二年生の一学期の終了即ち夏休み前まで在学し、夏休みに父親が九州福岡市の支店長に転任する迄在籍した。

二年生の一学期の終了時私はクラスで一番の成績であった。優等

生だったのだ。
ここまで書いて不思議に思ったのだが、私は「フゾク小学校」での女子生徒の存在についての記憶が全く無いと書いて来たのだが、今その頃綴り方や先生に提出する用紙に名前を記入する際、一年大谷正彦ではなくて常に「一年男（ダン）大谷正彦」と書いていた事を突如として思い出したのである。
即ち一年男は女の生徒がいたからこそ書いた事に他ならない。矢張り女性とはいたのだったと納得出来た。

第三部　昭和初期の九州福岡２

私の一家は両親と私と一人の妹と、それに神戸時代に岡山県から方向に来ていた女中の直原トメとの五名で博多の春吉（ハルヨシ）の四十川（シジュウカワ）というところに借りた家に転居した。

家の左側は田圃（タンボ）で蛙がないており、その田圃道を更に左の方へと進むと赤煉瓦塀に囲まれたキリスト教会が建っていた。教会は道の右側で協会より先は十字路になっていて家屋が沢山あって田圃は終わっていた。

転居間もなく九月の二学期が始まり私は春吉小学校に入学した。

私が入学して最初に奇妙に感じた事は、この学校の評価についてであった。

先生を始めとして総ての人が我が春吉校は立派で良い学校であって福岡市で第二番目の優秀小学校であるという自慢であった。

私の考えでは第二位というのは決して自慢できる事ではないのだ。一番なら自慢できる。しかしこの事はすぐにその理由が分った。

福岡市には第一位の小学校が厳存していてその地位は絶対に動かない事になっていたのである。その第一位の小学校は「大名町（ダイミョウマチ）」にある大名小学校なのだ。

大名町の名の通り大名町は旧黒田藩の福岡上の近くに位置し、お城のすぐ近くは警固（ケイゴ）マチといいその町には警固小学校があった。

それは私見で別に根拠はある訳ではないが私が思うには警固町には警固の衆の住居地区であったのではないかと考えた場合身分の高くない武士の町だったのではないかと想像する訳である。そして大名町の方が身分の高い武家屋敷町だったような気がするのである。

福岡市は中を隔てる那珂川を挟んで東側が博多で町人の町、西側が武士の町で福岡に分れており大名町の大名小学校は当然武家の子弟が主力の学校であった。

当時は未だ昔の身分制度が色濃く残っており、小学校などで学校

へ提出する書類にも一々氏名の右肩に士族、平民、新平民の別を書いたものだった。
私は父の生家が名字帯刀の家であったが農家であったので、平民と書くのがいつも口惜しく、肩身の狭い思いをした事を憶えている。
右の事情に依り大名小学校は当然士族の子供で同じその中でも高位の者の比率が高かった事は当然考えられるのである。
それに対して春吉小学校は町人の子弟が主であったので、当時の感覚としてどうしても身分的に下位に在る事を認めざるを得なかったのだろう。
そんな訳で私は福岡市第二の良い学校であった春吉小学校の生徒になった。
学校に通うようになってすぐに分った事は、仙台の「フゾク小学校」と比較して著しく教育内容の進度が遅れている事だった。
春吉小学校で習う教課内容は殆ど総てが既に私にとって既習のものであった。
だから私には学校がつまらなく授業は唯々退屈な時間であった。その結果私には学校は極めて興味の無いつまらない場所となった。
それに仙台の「フゾク小学校」は当時の日本の中流以上の家庭の子供が殆どで、友達の家へ遊びに行っても生活程度や家族の教養の程度が高い環境であったのに対し、春吉小学校は昭和初頭の日本の地方都市の極く平均的な経済的、社会的身分の人々の極く普通の生活環境であったので、何か溶け込み難い感じがして仲の良い友人も出来なかった。
この春吉では小学校二年生の二学期から四年生の一学期迄の丸二年間を過ごした。
四年生の一学期が終わって夏休みの間に我が一家は転居をした。転居先は先に書いた福岡と博多を隔てる那珂川河口の須崎の大橋の福岡川の須崎裏町という所で、海岸のすぐ傍であった。
当時は須崎の海岸は未だ砂浜であった時代で、市内の中心部にある唯一の海水浴場になっていた。

西公園近くの百々地（モモチ）の海水浴場は当時の感覚では街から離れた所の海水浴場であり、小学校の臨海学校の場所であった。

須崎に移転したので当然学区は変わり、私は大名小学校へ転校した。

その大名小学校に私は四年生の二学期から六年生の一学期迄在学した。

そして六年生の二学期と三学期は父の東京転任に伴って東京へ移り、当時の四谷第二尋常小学校へ転校した。

この四谷第二小学校は昭和二十年の東京大空襲で焼失した事で廃校になり、現存していない。同窓会も数年以前に後継者ゼロの事となって解散したのである。

須崎へ引っ越して転校した大名小学校は矢張り一番のランク付けがされているだけあって総ての点で春吉校より優れており、所謂進学校であったので卒業生の多くが中学校へ進学した。その頃は中学校へ入る事は高等教育を受ける事であり、裕福な家の子とか家系や身分が上に位置する家の子しか進学する事はなかった。軍隊でも中学卒業者は幹部候補生の受験資格が与えられて受験合格者は将校に任官できたのである。高学歴というのは中学卒業者以上の学歴を有する者を指していた時代である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2420f/

大正は遠くなりにけり

2010年10月17日13時09分発行